

鷗外『舞姫』研究史考

(三)

檀原みすず

前稿「鷗外『舞姫』研究史考^(註1)」では、昭和三五年から四五五年までを通観し、『舞姫』研究の変遷および諸論の検討を試みた。本稿では引きつづいて昭和四五年以降における『舞姫』研究の進展をたどり、さらに研究史全体を合わせて考えてみたい。

長谷川泉氏は、「解釈と鑑賞」連載(昭44・1~45・6)の「鷗外の詩と真実」において、『舞姫』の主人公太田豊太郎に濃密な影を落している武島務について言及し、主として武島務の未発表書簡や武島務妻ツネ方の資料および未公開の石黒忠恵日記などを踏まえて、鷗外が体験した陸軍部内における陰湿な要素と『舞姫』の作品構成との機微に照明を与えている。これら新資料の発掘に富んだ考証は「続鷗外」キタ・セクスアリス考^(註2)(昭46・12、明治書院)にまとめられている。同書中「『舞姫』の複雑な背景」「痛哭、武島の生涯と『舞姫』」の章は、豊太郎のモデルとして「武島務」をクローズアップしている。今まで埋れていた資料が多く紹介され、意義深い一書である。

『舞姫』論争は、従来、長谷川泉氏や臼井吉見氏によって、鷗外の自作自解と説かれ、『舞姫』の解釈に引用されるところが多かつ

た。これに対して、嘉部嘉隆氏の「舞姫論争についての一異見^(註3)」(『大坂樟蔭女子大学論集』昭44・11~48・11(三)(五)のみ「樟蔭国文学」9・10号に掲載)は、『舞姫』論争をその論理と方法の面から詳細に検討し、鷗外の論(「気取半之丞に与ふる書」

「再、気取半之丞に与ふる書」)が自作自解としての役割をもたないことを立証している。論考の(一)は、鷗外の論争方法についての考察で、「相沢謙吉」の署名による鷗外の論が、『舞姫』における相沢謙吉の造型と密着しているという点を解明し、忍月に対する鷗外の反論(六妄)が忍月の提出した非難の順序によっていない点を鋭く指摘して、「反論に際して順序をかえたことが鷗外にとって論争を有利に導く原因の一つになった」と説いている。また、笹洲友一^(註4)などは『舞姫』論争中の鷗外の論を前程として『舞姫』の人情本性格を主張し続けているが、鷗外の論争方法の検討や、鷗外の論の全体的な解釈を欠いているため、嘉部説の成立によって覆されることになる。論考の(二)以降では、鷗外と忍月との論理について検討が行われ、その結果鷗外の論が非論理的で強引な方法をとり、忍月の方に論理として肯定できる面があることを指摘し、「論争と

しては殆んど勝つことだけに焦点をあわせた」鷗外の論が自作自解としての役割をもっていないと説いている。嘉部氏の論考は、谷沢永一氏により「鷗外著作の綿密な読解と考証に基礎をおく鷗外の精神構造解明に、ようやく本格的な軌道を設定する画期をなした」として、大岡昇平氏と並び評されている。

山崎一類氏は「森鷗外研究史展望」「舞姫」研究史」（『評言と構想』パンフレット 461、468、昭44・11、45・9）で、過去の「舞姫」評を再評価し妥当であるかどうかの検討を試みている。主に「舞姫」の同時代評を精査することにウェイトが置かれている。「舞姫」論争における「鷗外の論争の方法と態度」を分析し、鷗外の反論の順序が忍月の批判の順序とほぼ逆になっているという指摘は、嘉部氏の見解と一致している。その中で、氏は謫天情仙の人情本的恋愛観を取り上げエリスの造型を検討する際に、笹淵友一論を受け継ぎ「舞姫」の典拠として「小青伝」説を提起している。笹淵氏の「情史」説にしても山崎氏の「小青伝」説にしても、エリスの造型がシナ近世文学に現われた女性とばかり決めつけてしまえるかどうか疑問である。山崎氏の「舞姫」研究史」の検討は、それまでの「舞姫」評を研究的に捕え直そうとした所に意義を認めることが出来るが、昭和九年迄で跡絶えてしまったのは惜しまれる。その後、「国文学」（昭45・3）に「最近における森鷗外研究の展望」として断片的な研究史の掲載に留まっている。

長谷川泉氏は「鷗外『舞姫』論をめぐって」（『文学語学』昭45・6）を出し、多様な「舞姫」論を問題別に要領よくまとめた上で、

小堀桂一郎著『若き日の森鷗外』を高く評価している。そして、『舞姫』が当時の鷗外の精神構造と強くかかわっているとみて、『舞姫』の受容に鷗外その人との遮断は許されないとする意見を促している。氏の見解は、『舞姫』を私小説化する傾向にある。

清水茂氏の「『エリス』像への一視角―『點化』(トランスズブスタンチアチオン)の問題に関連して―」（『日本近代文学』昭45・10）は、亡父を葬るべき金もないというエリスの部屋に「価高き花」のある矛盾に注目し、「純潔を売るほかにない切迫した状況」にある彼女の姿と「可憐殉情の純潔な倫理性」との「點化」の未熟性を見出している。そこからエリスは「強いられて街頭に立たざるを得なくなつた、ひとりの非力な、どん底に生きる娘」と解釈され、氏の卓見を示している。一方、鷗外が点化に成功した一例として『舞姫』の冒頭文「石炭をば早や積み果てつ」の「石炭」をとり上げ、「それは、冷たく黒ずんだ、豊太郎の内面に凝固する『一点の翳』、しかし火を点すれば炎々と燃えるかも知れぬものの徴表」とみてこれを『舞姫』破題の一句」と定めているが、「石炭」には果して清水氏の言うような意味が込められているであろうか。この書き出しは、人間不在にした沈静な周囲の状況を表わすのに効果的な文であって、その中でただ一人中等室に残った豊太郎がポツリと浮び上がり、周囲の状況が彼の孤独感を一層もり上げていて、そのような設定をうけてのち物語は主人公の沈鬱な心の内面へと潜り込んで行くのであるから、鷗外は「石炭」にそのような象徴的な意味を込めたのではないと思われる。

関良一「逍遙・鷗外考証と試論」(昭46・3、有精堂)に収録の「舞姫」考、「舞姫」鑑賞、「舞姫」の虚実」の三編は、以前発表の論考に一部補訂を加えた形で、およそが再録の論文である。その中で「舞姫」の「年立」に関する考察を試み、桑島説や長谷川説に対する異論として、作品を「序・破・急の三部」に区切り、作中の「明治廿一年の冬」と豊太郎の「二五歳」の折を最も重要な一年間の出来事として結びつけている。「舞姫」の「年立」に關しては多く論議されており、「年立」の考察によって作者鷗外と作中人物豊太郎との距離を推し測ることが出来るようだが、「舞姫」をフィクションとしてみるかぎり、「年立」にはこだわる必要はないのではないかと思われる。この「年立」に關しては後に竹盛天雄氏が説くように、鷗外の作家的手法の問題があると考えられる。

奏行正氏の「森鷗外」(「解釈と鑑賞」特集〈近代作家の情炎誌〉昭46・5)は、「鷗外と交渉のあった女性」を取り上げて鷗外の身辺に触れ、そして鷗外と女性を語る系族の事実と「舞姫」とがどう結びつくかに焦点をしぼり、事実と作品の問題に言及している。

「舞姫」をめぐる残された問題点」では、鷗外の系族が記述するエリス事件の因果が、「舞姫」の真実を傍証する伝記資料としては問題がありすぎるとして、「鷗外を敬愛し、「舞姫」の経緯が直接エリス事件とは無関係という系族の記録から、あえて「舞姫」の作因に關わる契機を求めようとすれば鷗外の他律的、後退的モチーフの確認に赴くことになろう」と述べている。秦氏には、以前に「鷗外『舞姫』の問題―その自伝性の限界をめぐって―」(別府大学「国語

国文学」昭44・10)があり、ここでは「舞姫」が鷗外自身の体験を踏まえることの限界を説き、あまりに鷗外の自伝的要素に傾斜して「舞姫」を読むことの危険を指摘している。

竹盛天雄氏の「森鷗外『舞姫』論―序説その恍惚をめぐって―」(国文学解釈と教材の研究)昭47・3)は、「舞姫」を「近代における貴種流離譚の変奏の一つ」とする見方に基いて、「クロスステル巷の古寺」に対する豊太郎の「恍惚」体験を追尋して行く。そして「明治二十一年の冬」から「舞姫」の世界が「幻滅を描く物語に転化」しはじめる点に注目し、「貴種の人豊太郎」が「卑種なる存在」にかきなっていくプロセスがあつてこそ豊太郎が近代における変奏された流離譚の主人公として生きつづけると述べる。近代文学研究において民俗学的な貴種流離譚という一風変わった見解を出している。

松原新一氏は「鷗外における『まことの我』」(国文学解釈と教材の研究)昭47・3)において、鷗外が「舞姫」に描かれたような恋愛の挫折をとおして、たちふさがる時代と社会の厚さを知るとともに「まことの我」なるものの埋蔵量の大きさをも知ったのではないかと述べ、「舞姫」における「まことの我」の内実について、「何を媒介として自己を表現してみても、ついに満足することのなかった巨大な精神の最初の自覚」と想定している。

「舞姫」は、周知のとおり「エリス」来日事件が鷗外の系族達によつて公表されてから、その論議が混迷を来している。成瀬正勝氏は「舞姫論異説―鷗外は実在のエリスとの結婚を希望してゐたとい

ふ推理を含む」(『国語と国文学』(『鷗外と漱石』特集号、昭47・4)において、喜美子・於菟・杏奴らの、實在のエリスやその処遇に関する証言をきびしく吟味し、喜美子の証言に、専ら兄鷗外の庇護に努めるあまりのきわめて主観的な解釈があることを分析している。そして、このような信憑性の少ない喜美子の証言を重視する渋川驥氏などの『舞姫』論を批判している。實在のエリス事件が陸軍における山縣の声望に頼って解決されたとする渋川説に対して、成瀬氏は、「山縣をモデルとした天方伯は、当時の鷗外の小説作法に従ったもの」とみて、「作品中に当時もともと政界の話題の中心となつてゐた山縣の渡欧とその帰朝とを暗示する筋を挿入することによつて、モデル小説の効果、読者の注目をひき関心をそそらうとしたのである。」と説き秀れた見解を示している。後半部では、「鷗外は親が許せばエリスと結婚するつもりで帰ってきたのだ」という推理小説の見解を試み、「鷗外は實在のエリスとの結婚を希望していた」という大胆な推察を行った。氏の説は、のちに星新一氏が「祖父・小金井良精の記」(昭49・2河出書房新社)の「資料・エリス」の章で、初めて紹介した良精日記によつて、有力な傍証を得ることになる。

刊行の明治二三年と時間的な続き具合として自然であるから「読者の享受を助けるためのリアリティに富んだ時間設定」であるという明解を与えている。

成瀬論および竹盛論は、鷗外の作家的手法という新しい観点からの追求で、創作者の執筆態度への深い理解がある。当時の読者としては、『舞姫』作中の「年立」が接近していることや、山縣有朋の外遊のニュースとの関連性をもつて、興味深く『舞姫』を読むことが出来たであろう。『舞姫』には、そういう鷗外のジャーナリストックで通俗的な面が顔をのぞかせていると思われる。

橋本威氏は、『舞姫』ノート(『近代文学研究ノート』第三冊昭47・4)で、豊太郎の「悲劇」の真因が「自我のめざめ」にはなく、彼の「弱くふびんなる心」にあると述べ、そのような属性をもつ半近代的明治社会の産み出した怪物である近代的知識人を描く所に『舞姫』の主題を措定している。氏の作品に密着した読解と地道な考証の態度には評価すべきものがある。

竹盛天雄氏は、『国文学』(昭47・3)掲載のものを起点とする『舞姫』論の続きとして、『豊太郎の反噓』(『舞姫』論)、『国文学』昭47・8、9)を連載し、『舞姫』の後半部、豊太郎の人事不省の間の視点が何人に託されていたかを、物語の構成や叙述を細分しながら見て行こうとする。それまでのエリスに対する自責の心理的葛藤から転じて、物語が相沢に対する反噓に切り替えられる点を指摘し、「相沢の視点や判断によるものを素材としながら、どちらがわの視点・判断か不分明な曖昧さを保ちつつ再構成されて行く

語り方」の中に、「男女の愛情生活が、当人同志の意志決定よりもまわりの種々な利害や因習によって影響されるような、ゲマインシャフトとしての社会状況を反映した被害者の立場や意識が絡んでいゝ」と説いている。そして、物語の語り手として擬装された豊太郎の性格こそ、鵬外のように官に規制されて生きている精神がやむをえずして選んだ反噬を盛る器であり、「貴種流離譚の変奏の一つ」が成立するゆえんだと説いている。

山崎正和著『鵬外闘う家長』（昭47・11、河出書房新社）は、鵬外を父性的役割の面からとらえている。「第三章 愛情のような雰囲気」では、エリスに対する豊太郎の「父性」を問題とし、宿命的な父性ゆえに相手によって愛されることを拒み、心の底では母性的な愛を求めて疼きつつけるという或る漠然とした悲しみがあると説いている。そのように鵬外の生涯が『舞姫』他二作で早くも決定的な答えを出してしまっていると山崎氏はみている。鵬外の父性という新しい観点からの分析に特色がある論考である。

吉野俊彦著『森鵬外私論』^(注5)（昭47・11、毎日新聞社）は、「サラリーマン鵬外の哀歎」という観点からの分析で、氏のサラリーマン体験を生活実感として鵬外把握に生かしているが、今日的なサラリーマンという概念が当時の鵬外の生きていた社会にあてはまるかどうか疑問である。吉野氏が鵬外をサラリーマンとして規定するのは現代的解釈が強すぎ、鵬外は一般勤労階級と同じくあつかわれるべきではないと思われる。

磯貝英夫氏の「啓蒙批評時代の鵬外(上)―その思考特性―」(『文

学』昭47・11)は、『舞姫』論のモノグラフではないが、鵬外初期の医事活動と文学活動との相関性を指摘し、『舞姫』も医学と文学との関連において統一的に考えるべきことを説いて示唆深い。氏は、『舞姫』のモチーフに触れ、「われわれは、それが、『東京医事新誌』からの追放、『医事新論』の創刊というあわたたしい空気のなかで書かれ、発表されたものであることを、媒介項として十分に考慮する必要がある。」と述べて、『舞姫』が「自己の正当性を主張する闘争の一環」であるという見解を示している。

十川信介氏の「太田豊太郎の憂鬱―うしろめたさについて―」(『文学』昭47・11)は、『舞姫』の執筆及び「弱性の人」豊太郎の設定に、「近代」を見切った鵬外の憂鬱と素顔の隠蔽という二つのモチーフを満足させるための手段を見ている。『舞姫』の筋書きを追跡して行くことで、豊太郎の心中に残る「うしろめたさ」を抉出している。

山田晃氏の「舞姫『愛づる』ことと『愛する』こと」(『国文学』特集へ森鵬外と日本の近代)昭48・8)は、『舞姫』に描かれた太田とエリスとの愛を、作中における「愛づ」「愛す」という二語の弁別によってみて行く。「愛づる心」は、太田という一種の自意識者にとって、「常ならずなりたる脳髓」によってはじめて奔出することを得た恋愛の心」であり、「一方『愛する情』は、『愛づる心』の支配する『恍惚の間』の過ぎるのを、息をひそめて待たねばならぬのである」としている。西洋文学から恋愛の思想を学ぶことのもかった日本の近代において、「愛」という言葉を用いるのには配慮

が必要であり、『舞姫』における愛の成立と挫折は、この問題をめぐっての鷗外の一つの実験ではなかったかと推定している。

江藤淳氏は、「鷗外と漱石(上)(下)―その留学と恋と―」(新潮「昭48・10、49・1」)で、鷗外と漱石との「留学と恋」とをとり上げ、両者に同質体験の共有を見出ししている。鷗外初期の三部作と『濠虚集』に収められた漱石初期の諸短篇には、「禁忌の犯し」という存在の深部のうずきや「逝ける事」の影が投じられていて、それが存在論的な罪であるために、鷗外は「弱くふびんな心」の主人公と捨てられて発狂する薄倖な女とを対比させ、『舞姫』一篇の情話を物語ることに自己の経験を平俗化してみせたと説いている。

蒲生芳郎氏著「森鷗外その冒険と挫折」(昭49・4、春秋社)は、書きおろし評論の形をとり、著者のあとがきにもあるように非専門の読者にも通じる懇切丁寧な叙述である。「第一章 帰ってきた鷗外『舞姫』前後」は、『航西日記』及び『還東日乗』における鷗外の感懐の違いを分析し、帰国船上での鷗外の鬱悽の主因をエリス来日に定め、鷗外の未練な愛がエリスに一縷の望みを賭けさせたのだと推論する。『舞姫』の主題を、未練な愛、感傷的な愛を克服し断念するストインズム、それに伴う孤独な苦悩といった観点から分析し、氏独自の問題提起を多く含んでいる。

山崎國紀氏の「鷗外にみる『恨』の意味―『舞姫』論異見―」(『立命館文学』昭49・7)は、〈恨〉の解釈に『舞姫』を理解する上での重要なポイントを定め、「冒頭に述べられる〈恨〉の情感も、豊太郎が、エリスを真正に愛し得ないエリスをへあはれなる狂

女〉に墮しめたという自己荷責が、この〈恨〉の中核的な心情であった」と断定する。そして、『舞姫』は、国造りの前衛者意識の犠牲となって悲劇に墮ちた女の物語であり、その自己の行為を省りみて出てくる「うらみ悲しみ」と「悔いる」のまじった男の「悔恨」の物語であると説いている。

川副國基氏は、『黄なる面』の太田豊太郎(『現代作家・作品論』昭49・10、河出書房新社)で、エリスはユダヤ人の少女ではないかという見解を示し、ユダヤ人の人種の劣等感やクロスステル巷近辺にユダヤ人街があったことなどを上げて検討している。作中でエリスが「驚きてわが黄なる面を打守りし」と反応し、「君は善き人なるべし」という言葉を発しているのは、「お互いに差別のなかに生きているという仲間意識が、はじめて見た豊太郎に一種の信頼感を感じさせた」と指摘している。氏の論考は、清水茂氏の「エリス」娼妓説と同見解を示し、興味深い考察である。

「エリス」追いつ返し処理に当たった小金井喜美子の夫、良精の日記が、星新一氏によって『祖父・小金井良精の記』(昭49・2、河出書房新社)の中で公表された。「資料・エリス」の章では、林太郎が数回西洋軒(精養軒)でエリス(日記にはこの名はない)と二人きりで会ったという重大な新事実が紹介されている。これは小金井喜美子の証言とは異なる点であり、今後の「エリス」研究に新たな照明を与えている。

長谷川泉著『鷗外文学の位相』(昭49・5、明治書院)は、既発表の「『舞姫』の材源」「『舞姫』等三部作論争とその基盤」「舞

「舞姫」論をめぐって」等の論文が収録され、「舞姫」理解と鑑賞の問題点」では、「文学享受の基本問題にかかわる重要な課題」が「臣視的に分類」され考察されている。「舞姫」に対する氏の「関心のありようの一端」が示されている。

長谷川泉氏の「エリス」「事件ノ独乙婦人」(『鷗外』15号、昭49・11)は、小金井良精日記の原文からエリス問題に関する記述を紹介し、それに基づき種々の事柄を検出して、その中で重要な問題は、良精日記においてエリスという名前が書かれず「事件ノ独乙婦人」と記されているだけであり、鷗外を追ってドイツから来日した女性が「エリス」という名前であったかどうかの確証が得られなくなっている。今まで小金井喜美子の記録に依拠して来たが、その原資料である良精日記が事実を証言しているとみる以上、これに従うべきであろう。「事件ノ」「例之」婦人という実名をふせたい方は暗号的であり、そういう表現をとっていることから、氏はエリス事件が森家や軍にとっての大問題で、「当時の軍においては、将校が外国婦人と結婚することはタブーであった」と断定しているが、林太郎や彼女の心理が謎のままである以上、成瀬正勝氏の「鷗外は親が許せばエリスと結婚するつもりで帰ってきた」とする説を否定するわけには行かないであろう。

竹盛天雄氏の「森鷗外『舞姫』―モチーフと形象」(『高等学校国語科教育研究講座』第三巻現代国語(2)小説Ⅰ、昭50・3、有精堂)では、「舞姫」という「作品をその構造にしたがって理解するため

の鷗外の文学活動に触れ、「志からみ草紙」発刊以後の翻訳群と「舞姫」との間に「一貫した性格と傾向」を見出し、「権力(何らかの)に対する自由(恋愛)とその悲劇的結末への嗟嘆」という共通のテーマを読み取っている。そしてそのようなテーマは、鷗外の医学論争による「孤立感」と「内発的に折れあい、翻訳であっても、ほとんど創作とかわらぬような言語表現上の内的真実が発揮されている」ことを鋭く指摘している。竹盛氏はここで「舞姫」冒頭の「石炭をば早や積み果てつ」の「石炭」の語に触れ、「文明開化の進展をうけもつエネルギー源」としての語の新しさを指摘し、「積み果てつ」の「つ」に「鷗外の見切りを含んだ強い出発の姿勢」を感じ取っているが、清水茂氏の「石炭」点化説と対比して、竹盛論特有の解釈となっている。

渡川驍氏は、「舞姫」再論(『鷗外』17号、昭50・7)を掲げ、エリス事件の解決をもっぱら陸軍における山脈の声望に頼ったとする見解および「舞姫」執筆の動機を家庭の事情に求める見解を再び論じている。渡川氏の論は、小金井喜美子の記述に依拠するもので、一貫して私小説的な「舞姫」観を温存している。結論の部分の引用(本編の主とする所は太田の懺悔に在りて、舞姫は実には懺悔によりて生じたる陪賓なり。)ということばは、嘉部嘉隆氏も指摘しているように、鷗外の意見ではなく忍月の「舞姫」評中の一文であることは明白な誤りであり、氏の不注意と言えよう。

中井義幸氏の「『エリス』という名について」(『鷗外』17号、昭50・7)の考察は、「舞姫」のヒロイン「エリス」という名前が、

ツルゲーネフの『幻影』の女主人公からとった名で実在女性の名にはありえないことを指摘している。従って、ドイツから鵬外を追って来日した女性の名が「エリス」であったことはありえなくなり、長谷川氏の述べる「森家の系族の間」で使われていた「暗号的名前」に他ならないとする見解を優位にしている。なお、『舞姫』が、ツルゲーネフ文学の特に『幻影』と『春の洪水』との密接な関係のもとに書かれた作品であるという中井氏の示唆はみのがしがた

い。
安田保雄氏は、『舞姫』の比較文学的考察―鵬外とツルゲーネフ―(『国語と国文学』昭50・8)で、『舞姫』の種本がツルゲーネフの『春波』であることを検出している。鵬外が「再、気取半之丞に与ふる書」において「足下はツルゲーネフの春波を読みしか」と言っているように、「舞姫」を執筆するに当たって鵬外は「春波」に学んでいることが明らかになった。鵬外は「再、気取半之丞に与ふる書」の中に、自ら「舞姫」のヒントを埋め込んでいるのである。安田氏の論考に至って『舞姫』の種本(鵬外が踏まえ、あるいは参考にしたと思われる文学作品)の問題は、ほぼ解決したかの感を受ける。その他に、鵬外の創作活動を支えた文学的造詣を看過することは出来ないだろう。

『鵬外全集』の附録「月報」(昭50・3、4、6 岩波書店)に、竹盛天雄氏が「石黒忠恵日記抄」(一)～(三)を紹介している。「石黒日記」は、すでに長谷川泉「続鵬外」キタ・セクスアリス「考」において一部分(武島務関係の記述)の抄出があったが、竹盛氏の

手によっては在独時から帰国後の部分の「石黒日記」が発掘されている。鵬外のドイツ留学時代を記した『独逸日記』の簡潔さに比べて、『石黒日記』の記述は克明であり、鵬外の書かなかった在独中の体験を知る手がかりとして、貴重な資料となっている。

竹盛天雄氏の「石黒・森のベルリン滞留と帰郷をめぐる(上)(中)(下)―緑の眼と白い薔薇―」(『文学』昭50・9、12、昭51・2)は、前資料に基づいて、在独中に石黒が親しんだ「蒼山」という女性や、森の「情人」のことを調べて出している。ベルリン出発以後の帰路の状況は、『石黒日記』が多弁で詳細であるのに比べ、森の『還東日乗』は寡黙で簡潔すぎる。『還東日乗』に森の秘められた心情があることは、『石黒日記』から森のドイツ滞留生活における「エリス」らしき女性の存在が判明し、後便の船で跡を追っていることが確認されていることによつて解るだろう。共有の滞留生活とその思い出をもつ石黒と森との間には、何か容易にかがいがたいものが存在しており、帰国後に二人の関係がこじれかけ距離が出来はじめていることも認められている。『舞姫』は、石黒と「蒼山」との交渉を知っている森の石黒に対する諷刺・挑戦的モチーフが濃厚であり、少くともベルリン滞留における共有体験の底部への刺激となつたのではないかと推察を含んでいる。「エリス」事件の実相は、従来の雲をつかむような情況からかなりはつきりして来たと言えよう。

山崎國紀氏は、かつての『舞姫』論を發展させ、『鵬外とエリス―『舞姫』論異見補遺―』(『国文学』昭50・10)で、『舞姫』冒頭に

ある豊太郎の「恨」の意識を重点とし、そこには実在の「エリス」を捨てたという鷗外の心的体験による痛恨があると説いている。氏の推定では、実在の「エリス」は鷗外の好みにかなった、自己抑制のきく、小柄で温和な美人ということであり、十分に鷗外の結婚の対象たり得た節がうなづけ、「エリス」と鷗外とは何らかの約束をしていたのでないかと思わせられる。来日した「エリス」を追い返さざるをえなくなった鷗外の心には「恨」が残り、「舞姫」はその鷗外の「恨」が仮託されたカタルシスの文学であったとするのが山崎氏の持論である。岸田美子氏に始まる「舞姫」の私小説的見解が根強く受け継がれているようである。鷗外と「エリス」とが「特別の関係」にあつたという所説は、成瀬正勝氏の推論を受け継いでおり、成瀬式の立証方法で、森於菟「時々の父鷗外」「父の映像」や小堀杏奴「晩年の父」など既存の資料の見直しや小金井喜美子「森於菟に」「次ぎの兄」に対する厳密な検討を行っている。さらに、星新一氏により紹介された良精日記の新事実を得て、「エリス」が鷗外にとつただならぬ人であるという見方は確定的となっている。山崎氏のこの「エリス」に関する考察は、「森鷗外〈恨〉に生きる」(昭51・12、講談社現代新書)の中に引き継がれ、「エリス実像と『舞姫』」の章で「エリス」問題が資料的に整理された。「自作小説の材料」の中で鷗外が語っている「ボーデン、ステット」の作品について、小西謙氏が「エルンスト・ブライプトロイ」がその作品ではないかと指摘したことが鷗外「舞姫」のタネ本として新聞の話題となったが、後に長谷川泉氏は「エルンスト・ブライ

プトロイ」という作品が鷗外の触れた作品とは異なることを暗示し、川上俊之氏の「『舞姫』をめぐる補註的考証―「エルンスト・ブライプトロイ」のこと等―」(『鷗外』18号、昭51・1)における精密な調査によって、小西謙氏指摘の「エルンスト・ブライプトロイ」は、鷗外の「舞姫」の筋書きとは形式的に一致しないことが証明された。それでは、なぜ鷗外が「自作小説の材料」の中ではつきりと「ボーデン・シュテット」の名を出しているのかという問題が生じてくるだろう。「ボーデン・シュテット」と言うのは鷗外の記憶違いかあるいはつい口がすべってしまったものかとも考えられるが、文壇登場期の「舞姫論争」や「小説論の改稿」等でみられる鷗外の戦闘的でどこまでも相手を圧伏させようとする態度から察すると、「舞姫」の材料に「ボーデン・ステット」というまだ誰もがその名前を知らない西洋作家をもち出したのは、鷗外自身の博識を顕示するためではなかったかと思われる。「ボーデン・ステット」という名を掲げるとは、鷗外が『舞姫』論争中でその名を出している「ツルゲニエフ」という著名な作家よりも読者の注意を引きつけるだろうし、野心的な鷗外の意図をはたすためにはより効果的だったと思われるのである。ともかく、川上氏の論文によって「エルンスト・ブライプトロイ」は「舞姫」の種本から除かれることになるだろう。それによってむしろ、安田保雄氏のツルゲニエフ「春波」説がかなりの比重をもつて来ると思われる。

『小泉浩一郎氏の「舞姫」論―鷗外出発期の課題―』(『評言と構想』特集〈森鷗外〉昭51・4)は、小金井良精日記により紹介され

た鷗外の「エリス」体験とそれによる鷗外内面の深刻な葛藤を踏えて論を展開している。そして「舞姫」は、実際の「エリス」事件と「舞姫」発表に至る迄に経過した一年三カ月の時間を介して、日本の現実を生きつつある鷗外が、内外面における自己の状況認識を作品世界に定着し、それに対応する自己の生き方の姿勢を模索しようとした作品として定義されている。

長谷川泉氏「鷗外」(岩波講座文学 10 表現の方法 7 研究と批評 下) 昭51・10)は、現在における鷗外研究の水準と到達点・問題点を説明している。とくに「舞姫」に焦点をしぼり、他の作品系譜との関連性が展望されている。

飛鳥井雅道氏の「鷗外その青春」(論叢刊 日本文化 7) 昭51・12、角川書店)は、日本近代の知識人の原像を森林太郎の行動の中に見出し、その「近代人の原像」を作家としてあるいは軍医としての鷗外の「二重人格性」の中から掘り出すことにスポットがあてられている。「第二章「舞姫」の構造」は、作家鷗外の誕生とその内面の敗北を述べた章で、「舞姫」が近代的自我を奪った上で徹底的に豊太郎とエリスの孤独を描いた作品としてみている。この飛鳥井氏の著書に対し、長谷川泉氏は「図書新聞」第43号(昭52・2・19)において「既出の研究書や研究成果を無視したことからくる訂正も要するところも生じている。」と書いている。また、「現代文学講座」第三卷「文学史の諸問題」(昭50・1)に収められた飛鳥井雅道氏の「近代作家と散文精神―森鷗外の場合を中心に―」にも同じく資料の取扱いや解釈などに訂正を要するところを多く残している。

篠原正瑛氏は「エリス考―鷗外とギリシャ神話―」(「鷗外」21号、昭52・7)を出し、中井義幸氏の「エリス」名についての考証を「たまたま読んだツルゲネフの作品『幻影』のなかの女主人公の名前を「舞姫」の女主人公のために借用したとするのは、あまりにも気まぐれ的な要素が強く、あまりにも論理が飛躍している。」ときびしく批判し、「舞姫」の主人公「エリス」の名がギリシャ神話に登場する争いと不和の女神「エリス」(Eris)の名前をとったものとする独自の見解を提出した。この女神が象徴する「争いと不和」は物語の中でエリスが演じた役割に等しいという理由を上げているが、氏の考証の成立には鷗外がギリシャ・ローマ神話についてかなり詳しい知識をもっていたという前提条件が充たされなければならぬ。氏が述べるようにもし鷗外がドイツ留学中に「詳解ギリシャ・ローマ神話辞典」(第一巻・第一部、一八八四―一八八六年発行)なるものに目を通していたとしたら、その時、鷗外に「舞姫」の構想があったかどうかが問題となるだろう。それから、鷗外がその辞典の中から気まぐれ的に「エリス」の名をみつけ出し、それを「舞姫」の女主人公の名前に選んだとするなら、篠原氏も中井氏を批判したような狭義の实在性という点に知らず知らずこだわっていることになる。

重松泰雄氏の「舞姫」の青春」(「近代文学」2) 昭52・9有斐閣)では今までの「舞姫」研究の行程がまとめられ、今後の研究方向が見通されている。この時期に「舞姫」研究史が成立したことは、石黒忠恵日記や小金井良精日記などの新資料が発掘され、従来の資料

(小金井喜美子などの系族の書)や方法では「舞姫」の研究は不毛に近くなったという現状において、過去の「舞姫」研究をとらえ直す必要が生じて来たためであろうと思われる。

中井義幸氏は、篠原氏の批判に対して「『エリス』再考」(『鷗外』22号、昭53・1)をもって反論し、「エリス」という名がツルゲーネフの『幻影』に拠っているとする自論が決して気まぐれでないことを立証している。鷗外が『幻影』中の「エリス」の名が出ている場面を抄訳して「舞姫」から六カ月後に発表しているのは、ツルゲーネフの文体見本を掲げることによって読者に一読を促し、ひきくらべて「舞姫」を論じてもらいたいという謎をもこめているものだと説いている。鷗外自身「気取半之丞に与ふる書」でツルゲーネフの『春波』という作品を示していることから、『舞姫』とツルゲーネフ文学との関係が緊密であることが確認できよう。今後「舞姫」を論ずる際、「春波」と「幻影」とは度外視できない作品となっている。

重松泰雄氏の「舞姫」前夜―「舞姫」研究の一つの前提として―(『文学』昭52・9)は、「舞姫」を、成立時点での「へ戦闘」を内包した「文づかひ」流の(あるいはもっと切実な)成立機構を持つ作品と規定し、単なる「留学土産」ではないとする立場に立って、磯貝英夫氏ならびに竹盛天雄氏の見解を取り入れつつ、「舞姫」の統一的な把握を試みている。鷗外の医事論争における孤立感と関連し、「舞姫」制作前夜における鷗外の心境を「瑞西館に歌を聞く」以降の翻訳三作と「舞姫」との類似性の中から分析し、そして「舞

姫」は鷗外にとつて一つの衝撃であった「東京医事新誌」追放事件をめぐる問題の渦中において発想され、自らを主筆の座から追った反動分子「石黒忠憲」への挑戦状であるという結論に到達している。今まで無視され勝ちであった資料や方法の検討とそれらの駆使とによって導かれた氏の創見も少なくなく、頷かれるところが多い。なお、重松氏には以前に「舞姫」雑考」(『文学論輯』16号、昭44・3)があり、その蒲生説に対する反論は説得力をもっている。

石川悌二氏は、「朝日新聞」の夕刊(昭53・2・28)に「舞姫」エリス試考」を掲げ、東京府公文書中の「府下居留地外止宿外国人表」に名記された明治二年一〇月八日来京、十一月一三日東京出立、横浜に向かった奥国ウラーシア曲馬団一行二三名中の奥国籍「エーマ女」(一八歳)を「舞姫」のエリス、その後日談とみる「普請中」の女旅芸人のモデルに擬し、鷗外を追って来日した女性と結びつけて推論している。その理由として、まず当時東京府下に止宿した外国人での公文書報告から洩れることは有りえないという考えを前提とし、エーマ女の年齢がエリスの一六・七の年齢(その後の経過を加えて日本へ来た年齢一八歳)と適合すること、「舞姫」と「普請中」はイヒロマンであること、「舞姫」の太田豊太郎の苦悩がドイツよりも東京での鷗外の心情を仮託したものであること、軍医学舎教官の鷗外が一〇月一六、一七日の両日休んで女を横浜に見送ったのは軽卒で一〇月一カ月ずらせば土・日曜日で自然となりエーマ女の横浜乗船記日とつじつまがあること等をつけてい

る。さらに、小金井良精日記に天候や日付などの作為があることを指摘しているが、これらは十分に検討の余地がある。石川氏が「止宿外国人表」という新しい資料に着眼したのは評価できよう。

この石川説に対して、長谷川泉氏は約二週間後の「朝日新聞」(昭53・3・14夕刊)誌上において「『舞姫』エリス試考」への「試考」を提出し、反論を試みている。石川説が「府下居留地外止宿外国人表」と気象庁の天候記録にこだわっていることに對し、エリス問題についての推論は、「小金井良精日記」「石黒日記」「西周日記」などの資料に拠るべきことを主張している。そして、良精日記の作為説を否定し、鷗外が女を横浜に見送った行動は二日間全日の休みをとったものではないこと、エーマ女の国籍がドイツ女「エリス」の国籍と違うこと、鷗外と赤松登志子との結婚に際して「エリス」問題が陸軍がちみで処理され精養軒に居た「エリス」が届出表から抹殺されたこと、「普譜中」はイヒロマンではないこと等の点を指摘して、エーマ女エリスの成立は不可能であると説いている。林太郎を追って来日した女性の人物像は依然としてぼやけたままである。彼女の素性は少しも明らかになっていない。問題の究明は今後に俟たねばならない。

婚が石黒や西らへの反発の意味を持つことを説いている。そして「舞姫」執筆のモチーフが公的生活では石黒など医学界指導者層に挑戦をなし、家庭生活では己れを取り巻く赤松家門閥からの脱出を覚悟し、これによって己れがおかれた自己矛盾を克服しようとしたときに湧き起ったものではないかと想定している。「舞姫」研究における一つのアプローチの仕方として、「西周日記」の導入は、資料的に意義をもっている。

「舞姫」研究史を通過して――発表当時、「舞姫」は諸家の関心を集め、「舞姫」に対する同時代評では作中の豊太郎とエリスの恋愛について言及しているものが多い。未だ近代文芸批評の草創期であり、作品批評と道徳批評とを混同するなど「舞姫」鑑賞のレベルは決して高くはなかったが、この同時代評の中に後の「舞姫」研究を促す種々の問題が内包されていることは見逃せないであろう。なかでも、石橋忍月と鷗外との間で闘わされた「舞姫」論争は、「殆んど勝つことだけに焦点をあわした」鷗外の論から、文壇登場期における鷗外の心情(戦闘的かつ野心的・蒙啓的なもの)を知る手がかりとして重視すべきものである。

同時代以後、「大正から昭和前期(戦前まで)」の「舞姫」論には、特に注目すべきものがみられない。ただ、昭和期に入ると鷗外の近親者の手によって、追憶録や伝記などが公表され、「舞姫」と関連深い「エリス」来日の事実が明るみに出されたことが後の「舞姫」

研究に重大な影響を及ぼしている。主に小金井喜美子の「次ぎの兄」(『冬柏』昭10・10～13・11)「森於菟に」(『文学』昭11・6)などによって、「エリス」は鷗外にとって「路頭の花」にすぎず、「舞姫」の執筆は「ちらちら同僚などの噂にのぼるので、ご自分からさっぱりと打明けたお積りでせう。」という主観性の強い記述が典拠となつて、「舞姫」論は私小説化の傾向を帯びてくる。

第三次『鷗外全集』(昭11・6～14・10、岩波書店)の刊行によつて、「独逸日記」が公表され、「舞姫」の本文が定着したことは、「舞姫」研究史上意義ぶかい事柄であり、以後の「舞姫」研究が活発に行われている。「独逸日記」から「舞姫」に描かれた青春を想定したものに伊藤至郎「若き日の鷗外」(昭16・10)や伊藤佐喜雄「『舞姫』の青春」(昭19・1)、「舞姫」を近代的自我の観点からいちはやくとらえた矢崎弾「鷗外の『舞姫』における近代的自覚の性格」(昭18・7)など、新しい『舞姫』論が相次いで出た。

戦後、「舞姫」論の著しい傾向は、太田豊太郎の「近代的自我」の覚醒と挫折をめぐる問題であり、その抵抗物として「家」及び「官僚機構」がクローズアップされている。日本近代文学史における自我文学の成立を「浮雲」と「舞姫」とに認めた瀬沼茂樹「日本文学における自我の問題」(昭23・10)や、「舞姫」のテーマを「封建人が近代人となる精神変革史」に措定した佐藤春夫「森鷗外のロマンティズム」(昭24・9)などがある。これに対立する論として、「舞姫」の恋愛を「人情本的恋愛」と規定し「主題把握の曖昧さはそのまま近代人としての鷗外の意識の曖昧さに繋がる」と

した笹淵友一「森鷗外―自我の覚醒とエキゾティシズム」(昭33・1)がある。その他、大石修平「『舞姫』論」(昭26・4)、猪野謙二「日本の近代化と文学」(昭29・1)、小田切秀雄「森鷗外『舞姫』三部作と『於母影』」(昭31・10)など多くの『舞姫』論が出現した。中でも、谷沢永一「鷗外『舞姫』の発想」(昭32・7)は、従来の『舞姫』観とは別の次元からその発想を問題として特色をもっている。

また、「エリス」来日事件との関連において『舞姫』のモチーフ並びにテーマを措定しようとした試みに、岸田美子「舞姫」(昭22・6)や平野謙「芸術と実生活」(昭24・5、6)、「舞姫」論(昭27・12)、長谷川泉「舞姫」(『解釈と鑑賞』昭32・8―9、11―12、33・1―3)、浜川曉「鷗外の私小説」(昭34・8)など代表的な論がある。小金井喜美子の「エリス」事件に関する証言を重視するあまり、『舞姫』は私小説的性格のみが追求されて、鷗外がこの作品を描いた芸術的な意図が見失われていると言えよう。そのような偏った読み方を警告し、「舞姫」の芸術的な鑑賞・批評を提唱したものに竹内好「エリスは空想の産物である」(昭36・5)、高橋健二「詩心の支えがなければ人情本である」(昭36・5)がある。

その後の『舞姫』研究の進展は、『舞姫』に投影されたモデルとして、鷗外その人のほかに武島務・原田直次郎・賀古鶴所・山具有朋など実在人物の発掘や、「舞姫森鷗外自筆草稿」の複製公刊(昭35・1)によって阿達義雄「森鷗外『舞姫』の改訂とその意義」(昭38・3)のような本文調査や、『舞姫』作中の時間的關係と地理的

関係の仮構的記述、あるいは初期の「舞姫」評が再評価されて「舞姫論争」への注目など、「舞姫」に対する多角的な研究成果が現われている。

昭和四〇年代に入り成瀬正勝他編『国語国文学研究史大成14 鵬外と漱石』（昭40・7）やそれに先立つ昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書20 森鷗外・末松謙澄・Jマードック』（昭38・11）において、研究史や文献目録が整備され、後の鵬外研究に便宜が与えられた。長谷川泉『続森鷗外論考』（昭42・12）に付された「舞姫」研究文献も「舞姫」単独の研究文献として意義深い事柄である。この時期の業績としては看過しえないものが少なくない。小堀桂一郎『若き日の森鷗外』（昭44・10）、長谷川泉『続鵬外「キタ・セクスアリス」考』（昭46・12）、成瀬正勝『舞姫論異説―鵬外は実在のエリスとの結婚を希望していたという推理を含む』（昭47・4）、十川信介『太田豊太郎の憂鬱―うしろめたさについて』（昭47・11）、嘉部嘉隆『舞姫論争についての一異見』（昭44・11）（昭48・11）、磯貝英夫『啓蒙批評時代の鵬外（上）』（昭47・11）、竹盛天雄『森鷗外「舞姫」―モチーフと形象』（昭50・3）などがそれである。

近年における「舞姫」研究は、比較文学界の進出によって、安田保雄『「舞姫」の比較文学的考察』（昭50・8）や中井義幸『「エリス」という名について』（昭50・7）など実証的な論考が輩出し、著しい進展がある。「舞姫」の種本としてツルゲーネフの『春波』説は有力であり、また「エリス」という名の典拠についても、ツル

ゲーネフの「幻影」説が最も近接していると思われる。鵬外とツルゲーネフ文学との結びつきは、「舞姫」を論ずる上で、みのがせない問題となっている。さらに、鵬外の創作活動を支えた文学的造詣についても広く検索してみる必要がある。

昨今、実在の「エリス」をめぐっての研究がはなはだしい。従来エリス問題についての推論は、小金井喜美子の「次ぎの兄」「森於菟に」などを論拠とするところが多かったが、最近ではその原資料である「小金井良精日記」および「石黒忠恵日記・「西周日記」などを基本資料とする傾向にある。これらの新資料をふまえて、「舞姫」研究は鵬外の真実の追求に関心が高まり、「舞姫」の太田豊太郎の苦悩はドイツでよりも東京での鵬外の心情を仮託したものとする見方が強く、それが軍医界と新婚生活とに深く関わっていると考える方が有力である。

ごく最近では、石川悌二氏が謎の「エリス」像を追って大胆な推論をし、新聞誌上で注目を集めたが、後に長谷川泉氏によって否定論が出された。今後の課題として、林太郎を追ってきた女性の素性や実名について、また林太郎や彼女の心理について、なお究明すべき余地が残されている。

注

1 「大阪樟蔭女子大学論集」第15号（昭53・3）所載。

2 笹淵友一「森鷗外―自我の覚醒とエキゾティシズム」

- (昭33・1 『浪漫主義文学の誕生』明治書院刊)・「森鷗外とシナ近世文学」(昭45・11 「古典と現代」17)・「森鷗外『舞姫』論」(昭43・6 「文学研究」)
- 3 桑島昌一「鷗外と『舞姫』について」(昭32・1 『鷗外・藤村・啄木・武郎』ペリカン書房刊)
- 4 長谷川泉「『舞姫』—近代名作鑑賞六—」(昭33・1 「国文学解釈と鑑賞」)
- 5 月刊「エコノミスト」の創刊号(昭45・5)以来昭和四七年五月号まで二五回に亙り、「サラリーマン森鷗外の哀歎」という題名で連載されたものに若干手が加えられて刊行された。
- 6 この論は、『舞姫』論 序説その「恍惚」をめぐって・『明治廿一年の冬』—『舞姫』論・「豊太郎の反噬」—『舞姫』論—と一連のもので、「一応の結び」とされている。
- 7 「諸家の鷗外論に対するいささかの疑念」(関西大学「国文学」第54号、昭52・9)
- 8 蒲生芳郎「『舞姫』私見—その出発時における鷗外の『文学』の構想—」(「文学」昭42・10)

(本学助手)